

失敗しない要求分析手法 2

— 今日から使える要求分析手法 —

アブストラクト

1. 要求分析はプロジェクト成功への第一歩

要求分析はプロジェクトの成否を左右する重要な工程である。情報処理推進機構（IPA）のアンケート調査でも、9割の企業が『失敗プロジェクトの原因は要求定義にある』と回答している。

したがって、要求分析を失敗せずに行うことこそが、システム開発者だけでなく、システム利用者も満足する真の「成功したプロジェクト」への第一歩であると考ええる。

2. 「要求分析」における失敗とは何か

一般に、プロジェクト全体の成否は、システムの品質・コスト・納期等から判断することが可能である。一方で、要求分析における「失敗」とは、何を基準に判断すべきなのか明確な定義が存在しない。

そこで当分科会メンバーのプロジェクト経験から「要求分析」における失敗を以下の通り定義した（図表 2.1）。

図表 2.1 「要求分析」における失敗

「要求分析以降において手戻りが発生し、その結果、プロジェクトの開発工数が増加、納期遅延を招くなど、プロジェクトに多大な影響を与えること」

3. 使える要求分析手法・取り込み漏れをなくす仕組み

要求分析における失敗の定義に沿って、当分科会メンバーの失敗事例を収集・分析したところ、4つの問題に集約された。集約された問題を失敗事例の件数やプロジェクトへ与える影響度合、メンバー意見から以下の2つの課題に取り組むこととした（図表 3.1）。

図表 3.1 要求分析手法における2つの課題

課題 1 実際のプロジェクトで使える、要求分析手法を研究する
課題 2 要求事項の漏れ・誤りを発見する手法を研究する

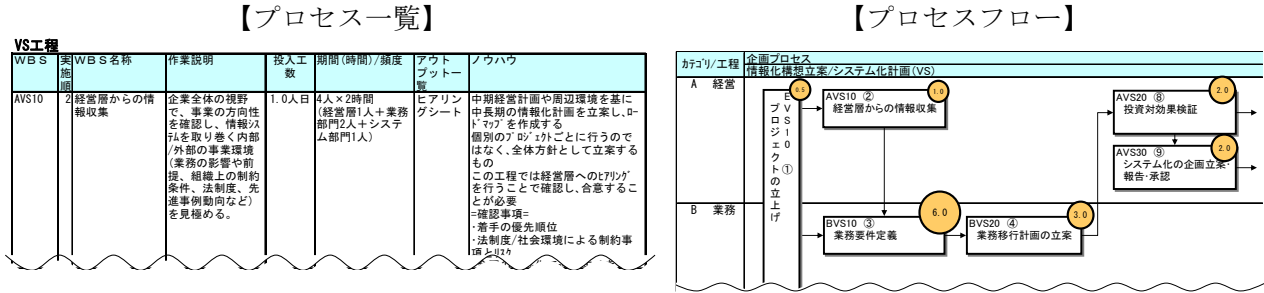
4. 研究内容／研究成果

4.1 課題 1 実際のプロジェクトで使える要求分析手法の研究

要求分析手法について調査したところ、当分科会メンバーは各社で独自に作成、運用している「開発標準」を基にシステム開発作業を行っているが、「失敗」は絶えず発生している。それは、開発期間の短期化等の様々な制約がある現場で、「開発標準」を使いこなせていないことを示唆している。

そこで、既存の「開発標準」の問題点を分析し、現場のプロジェクトで適用するためのノウハウを「スモールセット」としてまとめた。「スモールセット」は開発標準のWBSが一般に作業量が多いと過大に取られたり、少ない作業量だからと省略されてしまうことを回避するものである。また、既存のものには記載が無いHOW（ノウハウ）と実施の使用プロセス・手順を記載した（図表 4.1-1）。

図表 4.1-1 スモールセット



【「スモールセット」の特長】

- ① 1つの作業で複数のWBSを包含する場合はWBSを集約した
- ② 各WBSの作業ボリューム(工数・期間・頻度)を具体的に明示している
- ③ 各WBSに適用ノウハウを記載している

作成した「スモールセット」について過去の失敗プロジェクトで有効性の検証をシミュレーション形式で行った結果、失敗事例の82%(失敗事例62例中53例回避)は回避することが可能であることが確認できた。

4.2 課題2 要求事項の漏れ・誤りを発見する手法の研究

要求分析の失敗事例を調査しその原因を追究することで、問題解決の手がかりを探った。その結果、ユーザと開発者とはその立場の違いからシステム開発に対する考え方や意識が異なるため、開発者中心の要求分析では限界があり、ユーザ要求を十分に引き出すことは困難であることが判明した。そこで、「ユーザ視点」でチェックすることで、要求分析を通して開発者視点では意識できなかったユーザ要求の漏れを見つけ出すことを考え、チェックリストという形式でまとめあげた。

図表 4.2-1 ユーザ視点のチェックリスト

項目	WHAT(チェック内容)	詳細・補足・例	事前チェック	事後チェック	WHY(何のためにチェックするのか)	HOW(どのように対応すればよいか)	チェック対象	備考欄
1	システム化の目的や期待効果をステークホルダー間で共通認識できているか?	ステークホルダー			目的や期待効果をステークホルダー間で共通認識しておくことで、ベクトル合わせができ利害調整しやすくなる。様々なユーザ要求に対する正当な評価が可能となり、要求事項の過不足検証にも繋げられる。	要求分析フェーズの開始時点で、システム化企画書に記載された目的や期待効果(定性的・定量的)などをステークホルダーに周知させる。	システム化企画書	
					現行業務体制や部門の役割を把握すること	業務体制や部門の役割についてユーザから聞		

WHAT(チェック内容)	WHY(何のためにチェックするのか)	HOW(どのように対応すればよいか)
システム化の目的や期待効果をステークホルダー間で共通認識できているか?	目的や期待効果をステークホルダー間で共通認識しておくことで、ベクトル合わせができ利害調整しやすくなる。様々なユーザ要求に対する正当な評価が可能となり、要求事項の過不足検証にも繋げられる。	要求分析フェーズの開始時点で、システム化企画書に記載された目的や期待効果(定性的・定量的)などをステークホルダーに周知させる。

【「ユーザ視点のチェックリスト」の有用性】

- ① ユーザの考え方や関心事に焦点を当てている
- ② ユーザの持つ「隠れた要求」を引き出せる
- ③ 適用する際のアクティビティリストを用意

作成したチェックリストについて過去の失敗プロジェクトで有効性の検証をシミュレーション形式で行った結果、失敗事例の92%(失敗事例26例中24例回避)は回避することが可能であり、また、ほぼ全ての追加発生工数と手戻り工数が削減できることが確認できた。

5. 評価・提言

当分科会での研究成果は、熟練した技術や知識を必要とするものではなく、誰もが容易に使いこなすことができる。「スモールセット」を基に要求分析を効率良く実施し、その過程で「ユーザ視点のチェックリスト」を利用することで、要求事項の取り込み漏れを防止することが可能となる。